

江古田スケッチ 竹内縁郎と旅行かばん 1978/1
竹内縁郎・作詞 岡野光矢・作曲 capo on the 3rd fret

Am E7 E7 Am
忘れられないことの中に 何でもないようなことがある
Dm Am E7 Am E7 Am
それはいつも記憶のどこかで 色もあせずによみがえる
Am E7 E7 Am
ぼくが江古田に住んでいた 四年の月日のその中で
Dm Am E7 Am E7 Am
出会うひとがいつもたのしみで 若い日々は夢 現 つ
F6 G7 CM7 Dm7 G7 CM7
踏切のそばのキッサ店は 電車が通ればふるえだす
Dm7 G7 CM7 A7 Dm B7 E7
ウィナー・コーヒーのミルクかげんに ちよっとうるさい広瀬夏子
Am E7 Am
彼女にとってこの街は はじける季節の仮の宿
Dm Am F E7 Am
日芸 武蔵 武蔵野音大 思い出の街

雨の日などはマンガ抱いて カルチェあたりでお茶を飲む
セピア色の写真の中に ひげのマスターが笑っていた
ピアノたたいて坂本が うたったあの唄思い出す
それはいつも売れない男の さびしさうたった唄だった
駅前の八百屋で買ったポテト ふかして食うのもおつなもの
そんな言い訳笑いながら タバコねだった浜田信二
あいつにとってこの街は 夢を飛ばせるエアポート
日芸 武蔵 武蔵野音大 若い日の街

彼女を待たせて森岡は 雀荘ロンに入りびたり
西陽の部屋で別れの手紙 あいつはふるえて読んでいた
ぼくが江古田を去ったのは 木枯しもよりの秋だった
さようならと駅のホームで そっとひとりでつぶやいた
江古田文化の深夜映画に 涙流した佐野京子
夜明け前の下宿の窓に ひじかけながら彼女は言った
卒業したらあのひとは ふるさと行きの汽車に乗る
日芸 武蔵 武蔵野音大 思い出の街
日芸 武蔵 武蔵野音大 思い出の街

74年に秋葉ユミが歌った「よっぱらってみたい」で作詞作曲家としてデビューした竹内縁郎は、東京江古田に住みレコード・プロデュースを本業としていた。その竹内が地元の若手ミュージシャンや学生たちと作ったグループが竹内縁郎と旅行かばん、そして竹内が江古田をさる際、思い出にと仲間達の実名を入れた詩にメンバーの岡野光矢が曲を付けた「江古田スケッチ」がリリースされた。当時、練馬有線や池袋有線で1位になったが、バンド活動はほとんど無く、幻の曲といわれた。しかし、江古田にある日大芸術学部などでは、今でも歌い継がれているという。竹内は92年から「朝倉薫演劇団」を主宰、作家・演出家として活躍している。(なにかの雑誌の580ページCOPYから)